

# 出会った人すべてが財産

商学部 野村茉莉亜（私立品川女子学院高校出身）

**大**学1年生の春、私は悩んでいた。数ある部活やサークルなどの中で何に入ろうかと。たくさんチラシを見ても、ピンと来るものがどうにもなかったのだ。

そんなある日、運命的な出来事が起こった。私が生協の前で友人と待

ち合わせをしようとしていた時、吸い寄せられるように一つの貼り紙の前で足を止めた。それが「学生記者募集」の貼り紙だった。それを見た瞬間思った、「おもしろそう」と。何かこの活動でしか味わえない経験が出来そうな予感がした。その時すでに、私の心は「学生記者になる」と決めていた。

稿を読んで、「すごく、らしさ」がある文章」と言ってくれた。まだまだ自分の文章に自信が持てなかった私は、その言葉にとっても励まされた。実は、彼女とはその後も交流が続いている。食事をしたり、悩みを相談したり。就職が決まった時も、自分のことのように喜んでくれた。今や私にとってお姉さんのような存在になっている。

「私のこれまでを文章にしてくれてありがとう」と。その言葉を聞いた。び、「またがんばろう」と力が湧いた。思い起こせば、まだ夜も明けないうちから箱根駅伝の取材に行ったり、相撲部屋に二度も行ったり、普段は中々入れないTV局へOB取材に行ったり、色々な所へ足を運んだ。学生記者でしか味わえない経験がたくさん出来た。あの「学生記者募集」の貼り紙を見て感じた予感は現実となったのだ。あの時、あの貼り紙を見つけていなかったら、こんなに充実した思いで4年間を振り返ることができなかっただろう。中央大学で過ごした4年間、一番の財産は何かと聞かれば、それは「出会い」と即答できる。社会人としての責任や厳しさ、そして何より「出会い」の大切さを教えてくれた伊藤編集長取材をした人々、友人、お世話になった先生、先輩・後輩、出会った人すべてが私にとって財産になっている。



その年の夏、初めて取材をしたが、何をどう質問したら良いのかわからず、ついてきてくれた先輩に助けられてはかり。いざ原稿を書こうとしてもどう書いていいのか、すぐに手が止まった。どうにか何日もかけて書き上げ、その文章が活字となった時は言葉に言い表せないほど嬉しかった。その後、卒業を控えた4年生の女性を取材した時のこと。私が書いた原

取材をするたび、私はその人々から刺激とパワーをもらった。「こういう考え方もあるんだ」「こういう生き方もあるんだ」と驚くことばかりで、毎回新鮮な気持ちになった。また同時に、いかに自分の知らない世界が多いのかも思い知った。だけど、その人たちの経験や考えを文章にするのはとても難しいこと。間違いないようにしなければならぬことはもちろん、出来るだけ個性や魅力が伝わるように、と思うとなおさら。「私のつたない文章で大丈夫だろうか」と不安にかられたが、その不安を打ち消すように取材した人々たちから返ってくるのは、「ありがとう」という感謝の言葉だった。「素敵に書いてくれてありがとう」

2010年6月、内定先での最終面接の際、社長から思いがけない「書いた記事を読んだよ」の言葉。緊張がほどけ、嬉しい気持ち溢れた。思わず大きい声で「ありがとうござ

います！」と頭を下げた。気付いたら、自然と笑顔になっていた。これもまた、「一つの『出会い』。この新しい『出会い』を大切に、今春から社会人として精進していきたい。」

この4年間で出会った人々、

## 段ボール5箱に収まった『大学生活』

総合政策学部 山岸怜奈(東京都立立川高校出身)

大学4年の1月。友達からの何十通もの手紙を、ゴミ袋に入れた。新聞記事が貼り付けてある授業ノートやビニールひもでまとめた。大学で使った教科書と一緒に束にしたら、それは立派な資源、ゴミの山が完成した。

高校1年、高校3年と続く、人生3度目の引越しだった。今までずっと実家暮らしで、大きな引越しもこれで3回目。その都度、くだらない物は捨ててきているのだが、どうしても物はたまる。「今回の引越して要らない物は全て捨てよう」、そう考えていた。

机の引き出しから次から次へと出てくる封筒。旅行先で買ったキティのキーホルダーやゲームセンターで

『Hakumonちゅうおう』を読んでもくれた読者の皆様、そして私を支え、書く記事を楽しみにしていてくれた家族、そのすべての人たちにこの場をかりて感謝の言葉を贈ります。「ありがとう」。

取ってもらったぬいぐるみには、どれもタグが付いたまま。本棚にはいくつものクリアファイルが並んでおり、どのファイルにも溢れんばかりのプリントがたまっている。

何かと興味を持つ性格なため、無意識に集めてしまうイベントのチラシやフリーペーパー。参考になるものは授業のプリントと合わせ、「国際系」「組織論系」「地域系」などのカテゴリーに分けて整理したりもした。けれど、それらは今回の引越しですべて「要らないモノ」となった。残ったのは、文房具や手帳に、携帯、デジタルカメラとそれらの充電器や保証書。そして、おさめられていたプリントの厚みを残して変形した、透명한赤、青、緑の色とりど

りのクリアファイルだ。

「必要なものって、これだけなの？」と荷物が少なくなっていることに私は驚いた。今までの引越しでは、持っていきたいものはたくさんあった。授業のノート、友達がくれたお土産や手紙。つまらないガラクタまで「思い出がつまっているから」と手離せなかった。捨ててしまふとこれまでの積み重ねがなくなる気がして怖かった。その時の私には、時間や経験を裏付けてくれるカタチあるモノが必要だった。

大学生活4年間は、貪欲に経験を積んだ。大学1年でベンチャー企業のインターンに挑戦。太陽が照りつける8月の日中、黒のスーツで雑居ビルから新宿NSビルまでとび込み訪問をした。場所は新宿3丁目。オフィスに返ると昼間訪問した会社すべて電話をかけた。社長は

とても人情に熱い方で、私1人に人生の生き方を熱心に説いてくれた。2年からは取りつかれるようにゼミに熱中した。ロビーにホワイトボードが用意され、夜23時までPC室が利用できる総政棟は、昼夜、ゼミに取り組む環境を与えてくれた。早朝や週に2回ほどある放課後の自由時間はバイトに当て込んだ。早朝バイトのおにぎり屋では、深夜まで続いたゼミの資料作成のせいで朝4



前列中央が私

時半に起きられず遅刻をし、パートのおばさんにあきられたこともしばしば。

とにかく大学生活はハードスケジュールだった。「まだまだ頑張ろう」と自分を鼓舞できたのは、暖かく見守ってくれる家族、多くの経験を見せてくれる先生、一緒に頑張ってくれる仲間がいたから。私は本当に多くの方に支えられ、素敵な経験をさせてもらった。

振り返る間もなく駆け抜けた大学4年間。就活活動を終えてから半年

## 感謝の気持ちを忘れずに

法学部 田中祐美(私立米子北斗高校出身)

**私**の大学4年間は、「初めて」「私」と「驚き」の連続でした。田舎から上京した私が大学時に経験した印象深かったことは、1、カナダ留学2、就職活動です。他にも多々ありますが、今回は、カナダ留学と就職活動について、またそれらを経験して得たことなどを、ご紹介し

ます。まずカナダ留学。私は、この留学をするにあたり、やる気応援奨学金

以上過ぎた12月に、ようやく4年間が意味あるものだったと感じ始めた。ピリツとした寒さが張り詰める

1月、私は引越しの準備を始めた。大学生活で過ごした6ヶ月間の荷物が段ボール5箱に収まった時、それまで手離せなかったカタチあるモノが、渴いたのどで飲む水のように私の内にしみ込んでいるのを実感した。3月には卒業式が待っている。その時には大学生活の学びや記憶をもう一度胸に刻みこもう。

制度を利用しました。そのため、学校への提出資料や、面接練習などに多くの時間を費やし、様々な方に協力を得ました。留学先でも、ホストファミリーや、友人のお陰で毎日充実して過ごせました。日本に帰る日を間違え、飛行機を急遽とり直すというハプニングもありましたが、私はこの留学を通して、何事にも物怖じせず挑戦する姿勢を得られたと思います。留学前は、不安で仕方ない

時もありましたが、怯えていたら何も得られずに人生が終わってしまふことを学びました。そのため、今後の世界をより多く知り、経験したいと思うようになりました。

次に就職活動です。就職氷河期でもあり、就職活動をして一番に感じたことは、「皆頑張っているんだ」ということでした。夏でもスーツを着て、皆が必死に就職活動していることに感動しました。私はあるベンチャー企業のグループ面接で、「普通じゃない自己紹介をして下さい」

と言われ、水川きよしのズンドコ節と、目を二重から一重にする芸をしました。私は、抵抗なくそれらの芸ができたことに、自分に度胸がついたことを実感しました。就職活動を通して私は、多くの就職活動生、社会人と話をし、そのことにより、人がどういふ考えを持って仕事をしているか等が分かり、自分のこれから

の人生をより深く考えることができました。最後に、私がこの大学4年間で一番大切だと学んだことは、感謝することです。私が上記



前列右から2人目が私

のような経験ができたことも、全て多くの人の支えがあったお陰です。お世話になった人に、感謝の気持ちを返すこと。これが人として一番大切なのではないかと思います。これからは、感謝の気持ちを忘れず、立派な社会人として活躍していきたいと思